

思い出集 [連載補遺]

松本和一郎

(1966 年度入学、1970 年度学部卒業、1971 年度大学院進学、1974 年度同退学)

「1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私」と題して編年体の6回の連載を行ない、その時々を「思い出」として書いてきた。しかし、上手く流れに乗らず書き残したものもあるので、それらをとりとめもなく書き連ねておく。数学教室関連というわけでもない話題も入れておく。たとえば、私に近い年代の京大卒業生相手に“ギャングスターズ”というフレーズを口に出すと「いやあ、昔は強かったですねえ。東海ですか、あの頃の試合は面白かったですねえ」と10人中9人が返してくる。だから、“ギャングスターズ”も取り上げる。数学教室と全く無縁というわけでもないし。

[思い出： 行きつけの喫茶店・食堂・雀荘] 溝畑先生の火曜日のセミナー（専門家向け）が終わると決まって今はない“コントロール”という喫茶店に行った。そこでひとしきり会話を楽しんで解散するのである。そこでの話は研究活動に大いに有益であった。

この喫茶店には、ときとして佐藤幹夫先生のグループもやってきた。背中合わせに座ることもあり、そんなときは熱心にしゃべる佐藤先生の声が聞こえてくる。研究上の試みを話しておられることが多かったが、結構泥臭いことをしている。代数解析としてスマートな証明の論文をお書きになるけれど、試みの段階では泥臭いこともなさることが分かって安心した。

数理解析研究所で研究会があると、昼食に連れだってバス停“農学部前”の近くの“銀仙”に行くことがあった。名物のオーナーおばさんがいて、京大の先生方の消息について詳しく知っていた。ある年「広中平祐先生がアメリカの自宅を売って京都に家を買いたいとおっしゃっています。アメリカの家の土地は、いずれの隣家もやっと見えるくらい遠い広さだそうです。あなたは最近家を買ったそうですが、どれくらいしますか?」と聞かれた。どうやら、広大なアメリカの土地家屋を売っても京都市内では私の買った30坪の建売住宅さえ買えないようであった。日本の方が異常なのであろう。

助手になってしばらくしてからである。確率論の丹羽敏雄さんと京都産大の辻井芳樹さんが金曜日にセミナーをしていた。そのセミナーが終わると彼等はマージャンをしたいのだが、確率論の打ち手は厳しい人ばかりである。そこで彼らが目をつけたのが伊吹君と私である。5時半くらいになると大胆にも溝畑先生の研究室に電話がかかってくる。伊吹君か私を電話口で呼んで「マージャンしましょう」。こちらはまだ博士課程のセミナーが続いていることが多い。マージャンをなさらない溝畑先生の前でマージャンの相談もはばかれるので、「その件については、セミナーが終わり次第お部屋に伺って詳しいことをお聞きします」と言って切る。冷や汗ものである。マージャンの行きつけは“さくら荘”で、金曜日の晩は作用素論グループ、確率論グループ、幾何グループと最低3卓は成立していた。今では“さくら荘”も無く、マージャン仲間もちりぢりになった。

[思い出： 麻雀といえば池部先生] 私にとって、麻雀といえば池部先生である。池部先生は連載(1)に登場したが、その後の学生時代には講義を担当してもらったことがない。むしろ助手になってから“Schrödinger 方程式の基本解”などの講義を受けさせてもらった。先生と私の接点は麻雀である。池部先生の麻雀は“気合いの麻雀”で、「ドラがこわくて麻雀が打てるか!」と、煮詰まった段階でも暴牌する。こちらはそれを当て込んで“ドラの単騎待ち”でもリーチする。(麻雀の用語・ルールを知らない方は、すみませんが、各自調べて下さい。) 上記の丹羽さんが東京に転出してからは麻雀は作用素論

グループに入れてもらった。研究への支障を考えて、原則、金曜日にだけ麻雀をした。

池部先生は“正直”ということに厳しい方で、少しでも飾ったことを言う。「ほんとはですかあ？」とのぞき込むようにして聞き返された。池部先生のグループにはその雰囲気浸透していて、九州人の私にははなはだ居心地が良かった。作用素論らしい研究はしていないにもかかわらず、あるときから毎年、池部先生の夏の研究会に参加させてもらった。講演が終わって、内山さん（淳さん、連載(2)に登場）を先頭に酒と食事に繰り出すのも楽しかったし、その後のマージャンもウェルカムであった。

正月3日には先生のご自宅に押しかけて麻雀をした。先生、内山さん、岩塚明君、私と年によって変わるもう1人がメンバーであった。3日はライスボール（アメリカンフットボールの日本一を決める試合）がある日で、試合の間は私は抜けさせてもらった。

フランス留学から帰って、しばらくして3階北翼の研究室に移るように指示があって、フランス留学から帰ってきたばかりの作用素論の磯崎君と同室となった。磯崎君はパリのcafé exprès が気に入っていて、家庭のコンロにかけて使う“キャフェ エクスプレス 淹れ”を買ってきていた。美味しいキャフェ エクスプレスを何度か楽しんだが、日本のガスはフランスのものより火力が強いのか、次第に金属の器具全体が溶けて形が崩れてしまった。磯崎君も、もちろん麻雀好きである。このときの研究室の西隣の部屋が池部先生の研究室で、連載(3) [思い出： 深夜放送] で触れたように昼12時になるとラジオNHK第1放送番組「ひるのいこい」が壁越しに流れてきて私を和ませた。（連載(1)で「池辺助教授」となっているが間違いで、「池部助教授」が正しい。）

麻雀を語るとき、内山淳さんと西田吾郎さんに触れないわけにはいかない。内山さんについては既に連載(2)に書いた。西田吾郎さんには科目を担当して貰ったことがない。麻雀も、卓を囲むグループが別だから手合わせは多くはない。しかし、彼の打ち手はプロで、打牌から手を予測することは困難だった。重要度の低い牌から切っていかないのである。上がり手を考えて、結局要らない牌は早くから切る。しかも、重要度の高い牌と低い牌をませこぜに切って来る。打牌だけ観ると高い手の聴牌（テンパイ）に見えて、その実、手の内はガチャガチャということもしょっちゅうである。また、シャミセン（麻雀の場で言う口から出任せ、麻雀の場ではウソ言いあり）がきつい。根が正直な私は彼のシャミセンで何度かひどい目に遭った。それでも、憎めない楽しい人であった。

[思い出： 先生方の奥様] 前項で正月に池部先生のお宅で麻雀をしたことを書いたが、ご自宅に上がれば当然奥様のお世話になる。大変お世話になった奥様方について。

弟子であり助手であり仲人をしていただいた関係もあり、恩師・溝畑先生のお宅にはずいぶんお邪魔した。私たちの結婚の前後は、奥様が新家庭にあると良いものや子供をあやす小道具などについてお話をしてくださった。「茶の間のテーブルが広いと、子供達が絵を描いたり宿題をしたり皆一緒にできるから良いですよ」とのアドバイスで当時の私の家の茶の間に入る最大のテーブルを買ったが、今でも重宝している。助手になってしばらくすると、先生がフランスやイタリアから招聘した研究者を自宅に招待して接待する折に、私も彼等との親交があった関係で、何度も同席させていただいた。奥様は本場で仕込んだフランス料理の腕を振るわれた。なかなか凝った料理を作られて、美味であった。にこにこ穏やかに談笑なさる顔が懐かしい。

山口先生の奥様との交流は龍谷大学に移ってから、特に山口先生がお亡くなりになってからである。山口先生と同じでいろいろなことに興味を示された。山口先生の追悼研究会には全日・全講演出席されて一番前で聴講された。「専門外の話ばかりで御退屈ではありませんか？」と聞くと「若い方々が新しい知見を輝くようなお話になるのを拝見するのが楽しいです」とおっしゃった。先生に匹敵する大人物であった。

池部先生のお宅には麻雀で何うから、一回あたりの滞在時間はとても長い。昼頃にうかがって、午前0時も近い頃までである。その間、ビール・おつまみ・夕食と切れ目な

くお世話していただいた。初期の頃は麻雀にも参加された。いつもにこにこ穏やかな笑顔であった。

学部が上がって最初にお邪魔したのは永田先生のお宅であった。3回生の暮れに「正月にウチに来ない？」とのお誘いを受けて4、5人でうかがった。酒も飲んだが、ゲームなら何でも、の永田先生に教えて貰ってコントラクト・ブリッジをしたりした。奥様も時々話しに加わった。奥様は永田先生と名古屋大学と一緒に学んだ仲だとのことで、同志社高校の数学の先生をしておられた。私の父が他界した後、アルバイトを強化したくて永田先生に相談したら同志社高校の非常勤講師の口を紹介してくださった。2年間岩倉に通った。奥様ははっきりものを言う方で、当時の教職員組合が待遇改善としていささか高い要求を出すと、健全な学校経営の観点から反対意見を述べられたりもした。当時の同志社高校の教員には要求は高ければ高い方が良いとは思わない方も多くて、あるときの組合委員長の選挙で奥様が選ばれてしまった。安定した経営陣との関係を築く一方、言うべきことは言われて、立派に委員長任期を全うされた。奥様には“ぶっぱ”という歴代同志社高校生なら皆知っている渾名があった。いわれは「ブタとカップのあいこのこ」だそうである。初めていわれを聞いたとき、生徒の的確な観察眼に思わず吹き出した。奥様もこの渾名を楽しんでいた。学園祭の折の奥様のクラスのチーム名が“ブツパース”で、奥様は“ぶっぱ”のデザインのワッペンを付けてニコニコしておられた。

[思い出： 夏期・冬期の研究会] 夏にはいろいろな研究グループが合宿形式のセミナーを開いた。上記の作用素論グループの研究会もその1つである。もちろん、私の師の溝畑先生が主催する研究会もあった。大阪大学や早稲田大学との共催であったが、数多い溝畑先生のお弟子さん達がこぞって集まった。私が参加していた頃は笠原皓司さんが毎年世話役をしておられた。気さくに「今年は〇〇(地名)を考えているんやけどどうやろ？」と聞かれた。三方五湖のときは、宿泊所に当時使われ始めたオーバー・ヘッド・プロジェクトが無く、黒板も1枚しかなかった。白紙の模造紙をたくさん持ち込んで黒板に数枚重ねてピンで留めてマジックインキで書いて、1枚書き尽くすとそれを引き落として次の紙に書くという方式をとったが、大仰な割には能率が悪かった。三方五湖まで来て泳がないのはもったいないと思い、笠原さんをそそのかして、例年と異なり、午前中セミナー・午後自由時間(多くの人泳ぎに行く)・夕食・夜セミナーとして貰った。これは大失敗であった。毎日泳げるのはうれしいけれど、夜のセミナー時には、セミナー会場が和室であることもあって、夕食のビールが回って横になって寝てしまう人が出てきた。おとなしく寝ていればまだ良いが、「ぐうー、ぐうー」といびきが響くようになった。講演者はむか腹を立て「もう止めましょか？」と言い出す始末。

琵琶湖畔の北小松で研究会があったときは、事務に出張届けを出しに行くと「この距離でしたら宿泊費は出ません。毎日通って下さい」と言う。「合宿形式なのですが、どうしても宿泊できませんか？」と問うと「朝早くからのセミナー開始で、始発列車で行っても間に合わないのならば、宿泊できます」とのこと。笠原さんに頼んで午前6時からセミナーを始めるようにプログラムを組んで、最後に小さく目立たないように「プログラム変更あり」と入れて貰った。みなさん、このプログラムで出張手続きをした。研究会の初日は午後からの開始で、その冒頭で「プログラムに変更があります。翌日からの、午前の部の開始は10時からに変更します」と報じていただいたのは言うまでもない。

私は龍谷大学に移ってしばらくしてテニスを始めた。夏の研究会のときあらかじめ同志を募り、昼休みに時間を惜しんでテニスをした。どこの大学のセミナー・ハウスだったか、軽井沢では夏にもかかわらず涼しくて気持ちの良いテニスができた。こういう所ならば、夏のテニスコートに恋の花が開くこともあろうと思った。平地ではこうはいかない。しかし、テニスをしたい一念で、暑さに纏わりつかれてもテニスをする。あるとき、こんな暑さの中を、大矢勇次郎先生が参加された。本当はいけないのだが革靴であった。人のラケットを借りてプレーされたが、堂に入っている。昔取った杵柄だそうで、ウッドのラケット時代のフォームであったが、それだけにきちっとスイートスポットに当て

られた。

笠原さん、ご苦労様でした。

望月清さんが信州大学の教授をしていたときに“線形及び非線形の諸問題”という研究会が松本で開かれて（この研究会の歴史は古く、望月さんの信州大学着任以前からのものだそうだ）、池部先生・内山淳さん・西田孝明さん・岩塚君らと毎夏松本に通った。信州大学の数学教室の窓から望む北アルプスの壮観は忘れられない。信州大学には「高地生物学講座」があって、研究室の入り口の上に「あとは野となれ山となれ」と大書してあった。名物教授 小柴善一郎さんがいて、年齢は私よりだいぶ上だが、京都大学で私と同じ年度に博士号を取られた。このことをもって、「松本君とは同期だ」とおっしゃっていただいた。ずーと後になって、就職の超氷河期に卒業した龍谷大学の教え子がアブナイ企業に勤めてしまった。もっばら老人にアヤシイ債券を売るセールスマンである。あるとき「先生は小柴善一郎という人を知っていますか？」とメールが来た。「小柴さんには変なものを売りつけてはいけない」と返事した。他の人にも変なものを売りつけてはいけないのだが。それにしても世間は狭い。

セミナーの後は飲み屋“蔵”に行き、“二級酒岩波”を飲む。（このころは日本酒に二級酒・一級酒・特級酒があって、二級酒が断然安かった。しかし、高い方が旨いとは限らなかった。）ここで内山さんから“ざざむし”や“くさや”の味を教わった。はじめの頃、内山さんがくさやを注文したので“くさや”ってなんですか？と聞いたら「肥溜めのおい」との返事が返ってきた。

正月4日からは“松山キャンプ”である。工学部数理工学科の講師から筑波大学に転出していた梶谷邦彦さんが「研究者の正月は3日まで。プロ野球と同じで、向こう1年のシーズンに向けて体力を養うキャンプをしなければいけない」との趣旨で、溝畑先生のお弟子さんの北川さん、定松さん、猪狩さんがいる愛媛大学で4日から7日まで研究会を開始した。はじめの頃は参加者が多くはなかったの、梶谷さんの発案（命令）で各自2度講演することになった。1つは現在の研究の成果、もう1つは、今のテーマは早晚片付くから、10年後に（5年後だったか？）始める新テーマの準備状況、であった。後者は、毎年新ネタを見つけることがシンドかったが、視野を広げるために大いに役立ったし研究テーマが途切れて困るという事態に陥らずにすんだ。残念ながら参加者が増えてきて、2度の講演時間が確保できなくなり、2つ目はそのうち廃止となった。松山キャンプは、所を山口大学に代えて今も続いている。道後温泉から湯田温泉へ引っ越しである。しかし、初心を忘れないために、研究会の名前は今でも“松山キャンプ”である。

[思い出： 還暦記念の研究会] 1984年が溝畑先生の還暦の年である。初期のお弟子さん達が溝畑先生に還暦記念についてうかがうと、「京都大学を定年になるのでもなく、数学者を止めるわけでもないから」とおっしゃったそうで、それで溝畑グループは取り立てたことはしないことになった。ところが、溝畑先生と同学年の山口先生のグループは山口先生の多岐にわたる業績のサーベイと記念論文集をそれぞれ発刊するということが分かった。ことに、サーベイに関しては、“線形偏微分方程式の初期値問題”の節の執筆依頼が溝畑先生にあったことが判明した。同学年で研究分野も同じのお二人の還暦記念にこれほどの差があってはいけないだろうという判断から、急遽、溝畑グループも記念論文集を出すことに方針が変更された。ただ、レフェリーの過大さを考えて、レフェリーの必要の無い既に発表された論文の別刷りを集めることになった。総ページ数を抑えるために、1人あたりのページ数にも強い制限がついた。正直言って、なんだか窮屈な話しである。溝畑先生の日常のお考え方からすると、これで良いのか、と疑問に感じた。そういうときは本人に聞きに行くのが私の流儀である。先生の研究室を訪れて、「ご存じと思いますが、還暦の記念論文集が出されることになってきていますが、それに関して先生のご希望はありますか？」と聞くと、勢い込まれて「最近若い人の就職に当たって数篇の既出論文を条件にすることもあります、出版事情もあってなかなか若い人の論文が出ません。若い人の新しい論文を収録するようにはしていただけたらと思いま

す」とおっしゃった。これは既出論文の別刷りとは相容れない。さらに、「論文集以外にご希望はありますか？」と聞くと、「研究者になった人とは学会で会えるのですが、企業にいった人には会う機会が無いので、その人達と会えるとうれしいです」とおっしゃった。

記念論文集に若い人の未発表の論文を収録することを、論文集を企画した方々に取り次いだが、却下された。私にできることは、企業に行った研究室同窓生に力点を置いた同窓会の実施である。溝畑研の同窓生の名簿と住所を調べ上げるのに苦労した。卒業生名簿に頼ったので、住所が‘現住所’かどうか分からず不安だったが、宛先不明で返ってきたものは少なかった。青蓮院の向かいの共済関係の施設で40名ほども集まって同窓会を行うことができた。乾杯の後、うかつな私が「初期の方からお1人5分以内でお話をお願いします」と言って宴の本番を始めた。最初期の1学年1人の時代は5分以内で納まっていたが、1学年複数の時代になると1人の話に別の同期生が異議を唱えたりしていこうに進まなくなった。まずいな、と思ったが、よく考えると1人5分で40人がしゃべると、はなから施設の借り時間2時間に納まるわけがない。急遽、「1学年5分に変更します」と言ったが後の祭り。酒も入るし、しっちゃかめっちゃか、全体の3分の1の方々にもお話しただけなまま、散会となった。

“溝畑研同窓会”の準備をしている中で、私の方に‘還暦記念’に関して充足されないものが芽生えてきた。私は常に‘相互の充足’を重視する。今の場合、‘祝われる溝畑先生の満足’と‘祝う卒業生の満足’である。後者の、特に研究者になった者にとって、何かもう一つ、研究者として溝畑先生にお礼の意思を表す場が欲しくなった。諸般の事情で記念論文集に論文を提出しなかった方々にとってはなおさらであろう。そこで、ゼミ卒業生に限らず、「もういっぺん先生に話を聞いてもらいたい」方々は誰でもしゃべれる研究会をしようと思い立った。発表内容は未完成のものでも良く「現在の自分の研究活動報告」とした。現在の研究に行き詰まりがある人は何か先生のアドバイスがもらえたら…という気もあった。先生に楽しく聴いていただくというより、“先生に一苦勞お願いする”ということになるので、会の題名を「溝畑先生をわずらわす会」とした。溝畑先生の研究室を訪れて、こういう趣旨で研究会を開いて良いですか、と問うと、「失敗したらどうしますか？」と、変化球が来た。「そのときは、‘またバカの松本が要らんことをして、みろ転けた’ではいけませんか？」と答えたら「まあ、いいでしょう」と許可が出た。会期は1988年2月8日から12日までの5日間、講演者は飛び入りも入れて19名、20講演（1人で2回しゃべった人がいる）であった。東北大学出身の渡辺金治さんも講演して下さったことは、ことのほかうれしかった。ところが、肝心の溝畑先生が初日冒頭の井川さんの講演を聴いた後、「寒気がしますから後は失礼します」とおっしゃって帰宅されてしまったうえ、その後の会期中すべて欠席されてしまった。風邪をこじらせたようだ。「何か先生のアドバイスがもらえたら…」は不発に終わった。11日に予定していた先生の講演もキャンセルされた。望月さんに「お前が会に変な名前を付けるから、見ろ、先生が患っちゃった」と叱られた。先生にはせめて講演記録を読んでいただくと思い、追加の論文投稿も募り、20編を収容した私家製セミナーノートを発行した。その際、この年の1月・2月の火曜セミナーの講演記録もあわせて収録した。（2月最後の報告者・溝畑潔君は先生のご子息で、西田孝明さんの指導を受けていた。）巻頭や区切りの場所に畑政義君に提供していただいたフラクタル図形のグラフィックスを入れた。美しい模様で、カラーで入れられなかったのが残念だった。この頃、山口先生と畑君の共同研究で、フラクタルの理論が急速に展開されていた。

還暦を迎える後輩に「後輩や教え子から還暦記念の講演会を開きたいとの打診を受けていて、断りたいと思うがどうでしょう」と聞いてくる人がいる。私は「受けなさい」とアドバイスする。自分の還暦記念なのだから自分が受けたいかどうかで判断する、ということに異論がある。せっかくの機会だから、溝畑先生が望んだように、どなたかの役に立つような研究会にして、長年お世話になってきた学界に恩返しするのが良いと思う。

[思い出： 偏微分方程式と現象] 助手になった頃の私の研究分野は、いわゆる“ジェネラル セオリー”で、偏微分方程式の“可解性”、“準楕円性”、“一意性”、“適切性”などの偏微分方程式の解に関するある一性質が成り立つための条件を確立することであった。当時はこの分野が大流行であった。しかし、一性質だけを観ていると、現象との関係は見えてこない。本来、微分方程式はニュートンが微分法を開発し、惑星の運動を微分方程式を用いて説明したことに始まるとされている。(実はニュートンは“プリンキピア”において、微分法も微分方程式も使っていないで、「微分方程式研究の祖」とするのは間違いである、との説もある。) 微分方程式を研究するというからには、論文を書かないまでも、現象を記述する微分方程式について一定の知識が無いといけないと思った。基礎から学ぼうと思って、他学科の学部学生・院生向けの講義に出席することにした。はじめはこっそり潜り込んで聴講し、最後まで続けられるな、と思ったら「数学科の助手ですが、聴講を許可していただきたい」と申し入れて許可をいただいた。物理学に関しては、基礎的な理論系の科目は全て受講したし、その他の学科の科目も選んで受講した。その中でも良い刺激を受けた科目を挙げておくと、“連続体力学”(川原琢治・巽友正)、“統計熱力学”(恒藤敏彦)、“弾性波動論”(中野正吉)、“地球物理学(大気大循環論、回転流体力学)”(廣田勇)、“天体物理学(星間ガスの波動)”(加藤正二)などがある。後に恒藤先生とは龍谷大学理工学部数理情報学科で同僚になった。弾性波動論は龍谷大学で卒業論文のテーマに何度も使わせていただいたし、廣田先生には“現象のスケール”という見方を教わった。加藤先生とは、交通事故で亡くなった龍谷大学法学部所属の中山薫二さん(宇宙物理学専攻、龍谷大学の文系数学入試問題の出題・採点で長らくご一緒した)の偲ぶ会で再会した。中山さんの恩師であった。

巽先生は、学部運営においてはしばしば溝畑先生と衝突する右派の巨頭であったが、聴講の目的を説明すると「溝畑の助手」を受け入れて下さった。巽先生と永田先生は「同士」であった。正月に永田先生のお宅に宮崎の(当時は良家の御仁は飲まなかった)焼酎持参で学科の仲間とうかがっていた縁で、永田先生が亡くなった折りの追悼集会に私も呼ばれた。巽先生もいらっしゃってお話をされた。お話の後で「ずっと昔にお世話になりました」と挨拶をすると、「微分方程式は流体力学につながるが、ガセンちゃんの代数は別物なのが残念だ」とおっしゃるので、「いえいえ、代数は抽象度が高いけれど、基は現象の理解に発しているのです、流体力学と無縁ではないです。流体力学を微分方程式で表現し、その微分方程式の一般論を私たちが研究していて代数を使って成果を挙げています。ずーとつながっています」と言ったら「そうかそうか」ととても喜んでおられた。(“ガセンちゃん”とは永田先生の名前“雅宜”の誤読、“宜”を“宣”と取り違えたものと思う。しかし、“ガセンちゃん”は広く使われていた。) この会で私も話をして、学部時代に永田先生の下で学んだ“形式的冪級数環”の考え方を研究に使っていることを話した。この会の責任者の丸山正樹さんが「そういうことになってきているのか」と喜んで下さった。丸山さんとの縁は、丸山さんと隅広さん共催の講究「ホモロジー代数」に1, 2回顔を出しただけであるが、私が当初永田研究室にいたことの縁で談話室などで良く世間話をしていただいた。その丸山さんがこの会の後、まもなく亡くなられた。

流体力学を学ぶと、どうしてもボルツマン方程式に出会う。これについて話を聞きたいと思って物理学教室を訪ねて、最初に出会った教員らしい人に「すみませんが、ボルツマン方程式についてお話をうかがいたいのですが、どなたが良いでしょうか?」と聞いてみた。思案しているので不安になって「“ボルツマン方程式”というのは物理学において大事なものですか?」と聞いたら「もちろん!」との返事だが、それを研究している研究者は物理第1にも第2にもいない、とのことである。粒子の存在確率が未知数の方程式は観測になじまず、研究しにくいのもかもしれない。「敬して遠ざける」の感である。工学部の航空工学に高層飛行体を研究している曾根教授がいることを教えて貰って、曾根先生の話聞くことができた。「気圧が低い高層では粒子の平均自由行程をゼロにした流体近似が効かず、ボルツマン方程式のままで研究せざるを得ない。また、性能の高

いICチップを作る際は防塵のために真空に近い環境で作業をするが、この場合にも流体近似は効かない」とのことであった。浅野潔さんや鶴飼正二さんが数学の観点から研究を進めていることは抽象的には知っていたが、リアリティを持って認識したのはこの後である。

動物学科の集中講義“体内時計に関する研究”に出たこともある。朝9時から夕方6時まで、昼食の休憩を除いて延々と続く。これが月から金まで5日間である。数学が専門で良かったと思った。

結晶学に群論が使われている、というので、地質鉱物学科の講義“結晶学”に出てみた。この当時は理学部が学科分属制を取っていない時期で、地質鉱物学科の学生が1学年3人ほどしかいなかった。先生が教室に入ってくるなり「君は誰ですか？」“こっそり潜り込む”というのは20人くらいはいないと通用しない。「さいなら」と言って教室を出たのは言うまでもない。

理論的には未完成だが面白かった課題には“弾む流体 粘弾性の分子運動論”や“トルネードの理論と観測”(正しい表題は忘れた)などがあつた。トルネードの内部での分子運動のシミュレーションの始まりの音楽がR. シュトラウスの“ツァラトストラはかく語りき”で大笑いしてしまった。

これらの学習と池部先生の作用素論の夏期セミナー、望月さん等の“線形及び非線形の諸問題”、梶谷さんの“松山キャンプ”、西田孝明さんの流体力学の一連の講義、池部先生の一連の講義、山口昌哉先生(主催)の臨時の講義などで、「偏微分方程式」を見つめる視点の多様性を学んだ。山口先生が“フラクタル”の研究を畑君と始めた頃は、研究の進捗を毎週話して下さった。また、数理解析研究所が近いので、ここでのいろいろなテーマの研究集会にちよくちよく勝手に出席した。京都大学の研究環境は最高であった。

[思い出: ギャングスターズ] 私はアメリカン・フットボールが大好きである。プレーが細かく止まり、次のプレーに入る前にオフェンスがハドルを組んで次のプレーの選択を協議する。このとき、観客も各自、次のプレーを考える。観客が、手持ちの情報・観戦経験を基に考える時間が十分あるのが良い。もちろん、ディフェンスの対応も予想する。予測が当たってもうれしいが、予測と大きく異なるプレーが展開され、オフェンスであれディフェンスであれ、ビッグ・プレーが出るのも面白い。ルールが複雑だと言う人もいるが、論理的にできているから、原理を押さえれば難しくはない。

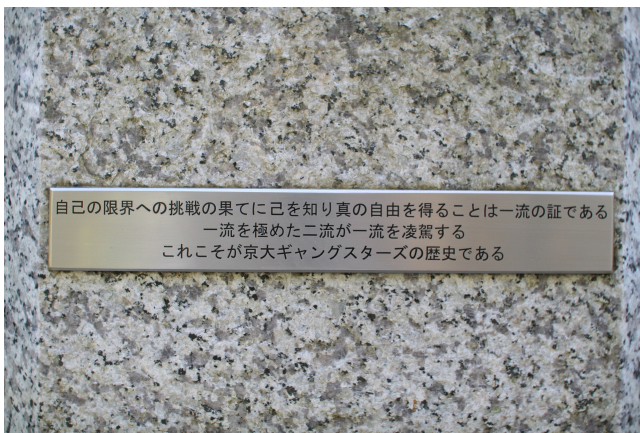
大学に入学してすぐに身体検査があつた。本部構内西の西部への通路の入り口に保健センターがあつてそこで身体検査を受けた。(この建物は“尊攘堂”というのだそうだ。品川弥二郎が吉田松陰の遺志を継いで創建したのが始まりで、収蔵品を京都大学に寄贈した際に今の地に新規建造された、と案内板にある。)検査が終わって出てくると、プロテクターに身を固めた大柄の人が「アメリカンフットボールをしませんか？」と勧誘してきた。残念ながら、軽いが長期の病気で医者から激しいスポーツは禁じられていたので断った。これが初めてのAFとの接触であつた。秋になると“今年こそ関西リーグ優勝”の立て看が出た。今と違って試合は京大農学部グラウンドをはじめとする各大学のグラウンドなどの無料で使えるグラウンドで行われた。タダだし、行きやすいから要の試合は見に行った。その当時は京大ギャングスターズは関学以外には勝てるほどに強くなっていた。しかし、関学には勝てそうで勝てない。私が応援に行くと負ける、というジレンマを感じて、ある年応援を自粛した。(この頃は人気の試合だけは野球場・陸上競技場・球技場で有料で行われるようになっていた。)そしたら、その年の京関戦に相手を零封して勝ってしまった。関学のリーグ戦146連勝の阻止である。ところがこの年、京大は関大に負けていて、関学に勝ったのに6勝1敗の同率優勝にとどまった。1976年のことである。どちらが甲子園ボールに出場するのか、当該チーム同士の勝敗で決めるのではなく、プレーオフが行われたが、これには完敗した。(私は我慢できずに観に行ってしまった。)その翌年は、エースQB宅田(理学部)が4回生で残っている京大の圧倒

的優位が言われたが、負けてしまった。“涙の日生球場”である。この“涙”は関学のうれし涙とのことだが、絶対京都大学の悔し涙である。実力は始めて京大の方が確かに上だったのだから。今でも後半のオフenseで宅田のパスが関学LBの手に吸い込まれたインターセプトのシーンが目に浮かぶ。(この試合も観に行ってしまった。)

京大が甲子園ボールに出るにはさらに5年を要した。この年は松田主将が2年連続の1000ヤードラッシャー(確か3回生のときは1300ヤード以上走っている)を達成した年で、甲子園ボールで日大に負けたにもかかわらず、史上初、チャック・ミルズ杯(全国の学生リーグで最も優秀な実績を上げた選手に与えられる)は敗戦チームの松田が貰った。その翌年1983年は、QB大社-WR梅津のホットラインで関西を制し、日大を破り、日本一を決める新生第1回ライスボールでもレナウン・ローバーズに勝って日本一になった。当時、やっとAFの生中継をNHKが始めた頃で、中継開始は試合開始の30分後であった。ハーフタイム・ショーの間に未中継の部分をビデオ放送するのである。ライスボールの試合は残り時間ほぼ0に1回生西田のダイブで逆転勝利した。タッチダウンの瞬間に中継は切れて歌舞伎中継が始まった。決勝のTDのリプレイも優勝監督インタビューも無しである。このとき、生涯唯一度“NHKへ抗議の電話”をした。



法然院
ギャングスターズの碑



石柱の銘

1987年のことである。せっせと1人でAF観戦に行く私に家内が「アメリカン・フットボールってそんなに面白いの？わたしもそのうち行ってみようかしら？」と言う。「行くなら次の試合だ。関西リーグの最終戦で関学とやる。今年はQB東海最後の年で勝てるが、来年から数年は京大は関学に勝てないぞ」。というわけで、この試合を家族連れで見に行った。この日から我が家のフットボール観戦ツアーが始まった。しかし、何年後だったか、QB小川の年の、今は無き西宮球場での試合で、開始早々滝のような雨が降ってきた。試合は続行され、「選手がびしょ濡れで闘っているのに、応援が雨宿りするわけにはいかない」と席を動かさなかったら、子供達が嫌気をさして、家族ツアーは廃止となった。QB金岡が縦横無尽にスクランブル・ランを決めた年、DLに伊藤・鈴木・松田・久原と並べてDBやオフenseのスカをDLが埋めておつりの来た年、など思い出すと楽しい。伊藤主将の年のリーグ戦は緒戦の京産大戦でフィールドゴールの3点を

失ったほかは零封であった。絶対負けない試合は安心して見ていられる。特に関学戦では、関学のオフenseのとき、QBのステップ・バックを上回る速さで京大DLが押し込み、OLとQBを一緒くたにクラッシュした。積年の溜飲が下がった。一方、ラグビー出身のQB杉本のひたすら“スクラムサイド”を突くQBランに、いつ点が取れるのか、じれったかった。しかし、信念のランを続けるといつかは点が取れるものである。とても“AF”のオフenseとは見えなかったが。

AFの正式の試合は秋のリーグ戦であるが、春にも練習試合・交流戦がある。昔のGSの春の定期戦は“東大戦”と“防衛大戦”であった。ところが、この春の定期戦に勝つと秋のリーグ戦で優勝できないという法則があった。逆に春の定期戦を連敗すると、秋には他を寄せつけない程強くなるのが常であった。だから、春も応援に行くのだが、内心「勝つなよ」と念じ、2試合とも負けると安堵したものである。

AFの観戦に行くと大山陽介君や岡田孝之君といつも一緒になった。高知大学時代の徳永浩雄君（“3. 助手時代”で触れた“7人の侍”の1人）が来ることもあった。前項で触れた研究室の大先輩で当時信州大学教授の望月清さんに出会ったこともある。学会などでたまに大山君に会うと「和一郎さん（彼らは私をこう呼んでくれる）、ひょんなところで会いましたね」と言う。彼と私の正規の場はAF試合会場である。岡田君はAFの歩く辞典で、〇〇年の△△大学の□□番、というとその選手の“名前・ポジション・戦歴”がスラスラと出てくる。ルールやフォーメーションにも詳しいAF博士である。関西学生AF連盟のスタッフ入りして久しい。

[思い出： 自炊] 私は不器用だから一人で自炊したことはない。しかし、実家から米を送ってもらえる友達の下宿・アパートに行ったときに、たまには自炊（の手伝いを）した。送って貰った米が古くなっていると穀象虫が大量に付いている。米を磨いても磨いても穀象虫が浮いてくる。そういう時は「タンパク源だ」と言ってあきらめて適当で切り上げた。終戦直後生まれは穀象虫や少々臭くなった食材から逃げてはいられなかった。伊吹君のアパートでも何回か自炊したが、ストライキ中に親しくなった山西君の下宿でも何度か自炊した。山西君は常滑のお寺の息子で静かであった。ストライキ中、目立っていた私にはときとして厳しい言葉もかけられた。落ち込んでいる私に彼は「ほかっとけや、そんなもん」と言って慰めてくれた。卒業後、地元に戻って高校の先生になり活躍していたが、忙しさが仇となり、癌の発見が遅れて30代で亡くなった。

大学3回生からであったと思う。教養部3組と一緒に地球物理に進んだ村岡良和君が下宿に越してきた。彼には信じがたい実績がある。大学1回生のとき天文同好会に入れあげて全く単位を取れなかった。（期末試験の受験そのものをしなかったのか、受験したけど全て不合格だったのかは知らない。）それでも、コンピュータによる受講登録がない昔は、本来は規則違反だが事務の方々の「温情の見逃し」で大量の二重登録ができた。期末試験も2週間をかけてゆっくり行っていたので、履修登録上は重複していても期末試験は重複しないものが結構あった。彼は2回生のときに2年分の必要単位をすべて取って希望の地球物理学科に進んだ。彼の実家は野菜屋さん（後にスーパーマーケットになった）で、小さいときから料理をしていたとのことであった。下宿の台所は、大家さんの食事時をはずせば使わせてもらったので、彼の提案で2人で自炊をすることになった。第1回は下宿のみんなをうらやましがらせるために、彼の発案でいい匂いが充満するステーキにした。分担してキャベツを切っていると彼が「手際が悪いなあ、見ていてイライラする。料理は俺がするから座っててくれ」ということで、急遽、作る人と後片付けをする人の分業が決まった。（この頃「キミ作る人、ボク食べる人」というコマースフレーズがはやっていたが、“食べるだけ”というわけにはいかなかった。）美味しい夕食の後で約束通り皿洗いをした。“逃げた女房”を、一節太郎のダミ声を真似て歌いながらの作業だったが、これが「女房に逃げられた男の悲哀が良く出ている」と下宿中に受けた。3回目くらいであったか、「松本、餃子は好きか?」「大好き!」とい

うことで餃子を作ることになった。100個作る。台所のテーブルに100個は並びきれないので2回に分けて包む。これくらいなら私にもできる。焼く役はもちろん村岡君で、「食べててくれ」と言われたのを良いことに次から次に食べていた。下宿の大家さん宅に20個、下宿生のみなさんに20個差し入れしたが、村岡君が「焼きすぎて胸が一杯になったから俺はいいわ」と言い出した。結局、私は40個ほど食ったと記憶しているが、「いや、松本は70個は食った」という者もいて、ほんとの所は定かでない。

[思い出： 散歩道] 若い頃、なんだか気がふさぐと修学院離宮や赤山禅院の前の道を自転車で走り回った。ときには詩仙堂や曼殊院にも上がったが、学生時代の詩仙堂は荒れ放題であった。曼殊院も庭には雑草が目立ちせつかくの庭がもったいなかった。あるとき、突然、詩仙堂がきれいに整備され、曼殊院の手入れも良くなった。喜ばしいことである。

気分が穏やかなときは京大正門前から吉田神社の前を通過して、あるいは吉田山の北側の登り口から上って三高寮歌の“紅萌ゆる”の碑がある吉田山頂を経て、いずれにしても宗忠神社に出て、そこから真東に下って真如堂に出る。京大正門前から上ると菓子神様をまつる菓祖神社があり、節分会の折りは駄菓子のおひねりを配っていたが今はどうだろう。北側から上ると、急なコンクリート道で、後に留学したパリのエコールポリテクニク（ロゼール駅から急なコンクリート階段の道を上った丘の上にある）に上る石畳を思い出す。学生時代の真如堂は観光客が来ずに静かであった。昔はお堂の前の小堂でお菓子付きの抹茶がいただけた。今でも「茶所」の看板はあるが、久しく戸が開いているのに出会ったことがない。真如堂を右手に回り込むと黒谷金戒光明寺の墓地に出る。その途上に会津墓地があり、禁門の変や鳥羽伏見の戦いで戦病死した会津藩士の墓がある。金戒光明寺の広い墓地の急な坂を下ると山門を経て丸太町通りに出る。ここから東・北に歩いて“おめん”で“おめん”を食べて帰ることが多かった。今のように混んでいなかったし、“おめん”の具の量もずっと多かった。

穏やかな気分のもうひとつの散歩道は、銀閣寺の門の前から南に道沿いに歩くコースで、法然院の前に出る。アベック（古い!）の散歩道だが、前に一組、後ろに一組見え隠れする程度だから、チョンガーでも気にならなかった。法然院は有名人の墓が多いところで、河上肇・谷崎潤一郎の墓が有名である。谷崎の墓所にはしだれ桜の苗が植えてあって、入学時には高さ1メートルほどの細い木であったが、今や5～6メートルもの大木になっている。他にも九鬼周造（哲学者）・内藤湖南（東洋史学者）・福田平八郎（日本画家）・稲垣足穂（作家）・四世竹本腰路太夫（浄瑠璃語り）など多士済々である。自然科学では福井謙一（化学者、揮毫「智自在」の石碑もある）・玉城嘉十郎（物理学者、京大理学部シリーズ“玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会”が続いている）の墓がある。有名人かどうかは知らないが、墓石前面一杯に「鴛鴦の水の中では足けんか」と彫った墓もあり、生前の夫婦関係をうかがわせる。松浦重武先生の墓もある。墓ではないが、京大アメリカンフットボール部ギャングスターズの碑もある。私は明るいこの墓地が好きでしばしば通った。夕暮れ時に吉田山に沈む夕陽を見るのが好きだったが、残念ながら今は墓地西側の木々がとても高くなって山に沈む夕陽を眺めることはできない。

たまには“哲学の道”も歩いたが、私の学生時代は草ぼうぼうで歩くのも容易でなかった。学生時代にこの難儀な道を歩ききって、若王子まで歩き通したことはなかった。これでは哲学を考えながら歩くことはできまい、と思った。それがある日突然今のようにきれいに整備された。飛び石が続き石のベンチがしつらえてあると、これも哲学思考には向かないように思う。西田幾多郎の歌碑「人は人 吾/はわれ也 とに/かくに 吾が行/く道を吾/は行なり/寸志」があり、西田本人の揮毫によるとのことである。改行の仕方が独特で、それが西田哲学と関係あるのかどうかは知らない。

[思い出： 入試の採点] 私が助手になった頃はまだ学生運動の余韻があって、入試粉砕を叫ぶ一派がいた。不慮の事態が発生するといけなから、というので学外に採点場を確保して、専用バスで通って採点した。幸い、採点場に学生が乱入することはなかった。

京大の入試の採点では、人数の多い工学部を除いて、1学部1問を1人で請け負う。勿論、採点点検者が付くからいい加減な採点はできない。学部の定員が異なるから、定員の少ない学部が当たると楽だが、多い学部だと当然苦勞する。人数だけではなく、問題の性格・学部の風潮も楽かどうか影響する。文学部は定員の割に概して楽である。ダルマの絵を描いてあとは白紙というような潔い答案が多いから採点しやすい。逆に定員も多い上に（屁）理屈をこねるのに慣れている法学部は鬼門である。ある年、法学部の証明問題を担当した。どの受験生も答案用紙一杯に証明を書いて、「よって証明された」と結んであるが、正しい証明とは限らない。全く本質をはずして意味を成さないが、文章はきれいで答案用紙一杯に書いてある答案が続出すると、だんだん腹が立ってくる。しかし、正確と公平を保たねばならないので胃が痛くなる。点検者に「松本さん、どうしてこれが満点なのですか？」と聞かれた。白紙答案である。読まずにすむ、といううれしさにおもわず満点の点数をつけてしまったのだ。

ある年、また証明問題の採点が当たった。答案に「自明である」とだけ書いてある。「これは0点ですね」というと、採点委員長の永田雅宜先生が「満点ですよ」と言う。何故かと聞くと、「だって自明なんだもの」。わたしは「入試答案というものは易しいなら易しいなりに答案用紙の2/3は書くのが仁義だ」と主張して引かなかったので長引いた。結局、「自明」ではダメとなったような気がするが、記憶が定かでない。

また、ある年は積分に関わる不等式の証明問題で、小問(1)に相加相乗平均を使えばすぐ証明できる問題が出た。ところがこの正答率が極めて低い。答案を読んでも「こんな易しく見せかけた引っ掛けには騙されないぞ」という気分がプンプンしている。易しい問題を怪しんで捏ねくり回して結局間違ってしまう。そのあおりで小問(2)も間違ってしまう。「京都大学の数学の問題は骨がある」との評価が定まっているから、妙に易しい問題を出題してはいけない。

溝畑先生がこの小問(2)を見て「これは不完全ガンマ函数の問題です。相加相乗平均を使うような安易な証明をしてはいけません」とおっしゃるのだが、その立場からの証明がなかなかできない。結局、翌日、「一晩考えたらできました」とおっしゃって黒板で証明をしてくださったが、結構長いものであった。

採点会場でいただいた大塚香代先生の抹茶一服で心が和んだ。

[思い出： 新着雑誌室] 昔は数学教室の新館2階の北側に“新着雑誌室”があって、新着雑誌を一定期間書架に置いてあった。専任の事務の人が2人いて、秘書的な仕事もするし（秘書室は別にあって松本さんという方が専任でいた）火曜日はコーヒーデーで淹れ立てのコーヒーを提供した。暇があるとここに来て新着雑誌を開いて研究の最新情報を仕入れた。私が最初の論文を書いた頃は手動タイプの時代で、教授の方々は新着雑誌室の人に手書きの論文のタイプ打ちを頼んでいた。私も最初の論文のタイプ打ちを頼んだが、依頼が多すぎるから「助手は自分でタイプを打って」と言われてタイプ打ちの教則本を渡された。私がブラインドでタイプを打てるのはこのときの訓練のおかげである。（最近右手と左手の連携が悪くなり、左手が順序を無視して早くなる傾向にある。「ma」と打つつもりが「am」となってしまう。年は取りたくない。）

コーヒーデーにはいろいろな分野の人が集まるから、専門外の基礎的知識を簡単に仕入れることができた。最初の論文が受理されて印刷に回っている頃の金曜日の昼前であった。新着雑誌室でコーヒーを飲んでいて、大学院で同期の中島和文君（微分幾何学）がやってきた。「丁度いい、聞きたいことがある」とのこと。J. J. Kohnの擬微分作用素の教科書に分からないところがあるから教えて欲しいと頼まれた。擬微分作用素ならばお手の物だと引き受けた。中島君の研究室に行くと、「分からないのはアペンディクス

のポワンカレの不等式で、ソボレフ指数が負の場合」とのこと。「それなら今印刷に回っている僕の論文にもその定理の証明を書いたので説明するよ」と言って説明した。「分かった?」と聞くと「分からない」と言う。それじゃあともう一度証明を繰り返した。それでも「分からない」と言う。「どこが分からないのか?」と問うと、「その行から次の行へのところが分からない」と言う。なんとも当たり前の所だが、そこだけが分からないという。なんてバカなんだと思って、「ここはねえ」と言って、ふと「なぜこれで良いんだろう」と思ったら分からなくなった。「いちど考えてみる」と言って帰った。午後の博士課程のセミナーの冒頭で少し時間を貰ってこの問題を話題にした。私の証明はセミナーで報告したことがあってみんな承認してくれたものである。中島君が問題にした箇所が正しいのか、みんなに注意を促すと、みんな分からなくなった。そのとき、伊吹君が「反例が挙がるわ、ディラックのデルタや」と叫んだ。反例が挙がる以上、私の、そしてコーンの証明は間違っている。先生から「印刷に回っている論文にソボレフ指数が負の場合を本当に使っているか調べなさい」と指示が出た。その晩確認したところ、負の場合も使っているが、正しい範囲に納まっていることが分かった。(指数が負ならば全くダメ、というわけではないことが分かっていた。)したがって、論文の結果には影響がないが、一部に間違った証明が書いてることになる。京都大学のジャーナルは毎号が入札で落札価格が決まる。価格はページ数が大きく影響する。出費は国庫から成されるので落札後にページ数を増やすことも減らすことも難しいとのことである。(少なくとも、当時は。)間違っている部分を間違いのない記述で、同じページ数に納まるように直すことを指示された。主張が後退した分大幅に短くてすむ修正証明を何とか引き延ばしてページ数を合わせた。本当にラッキーなことに、間違いを書いた論文を出す危機を新着雑誌室が救ってくれた。

もう助手になっていたある年の4月、伊吹君と新着雑誌室で位相幾何学の命題について議論をしていると、傍らで聞いていた人が低い落ち着いた声で「それはね、…だよ」と教えてくれた。伊吹君も私も彼が誰だか知らなかったので部屋の小山美智子さんに「彼は新任の講師かなんかですか?」と聞いたら「何言ってるの、今年修士に入った宇敷(重廣)さんじゃないの」とのことであった。それにしても落ち着き払っていた。

大学院を活性化させるために、修士課程の学生を増やし、あわせて博士後期課程への編入を容易にして、院生活動をマスの力で“にぎやか”にすることが望まれる。(私たちが院生の頃は“にぎやか”だった。)あわせて、専門分野を超えた交流と共同研究の活性化のために、新着雑誌室とコーヒーサービスを復活させると良いと思う。

了